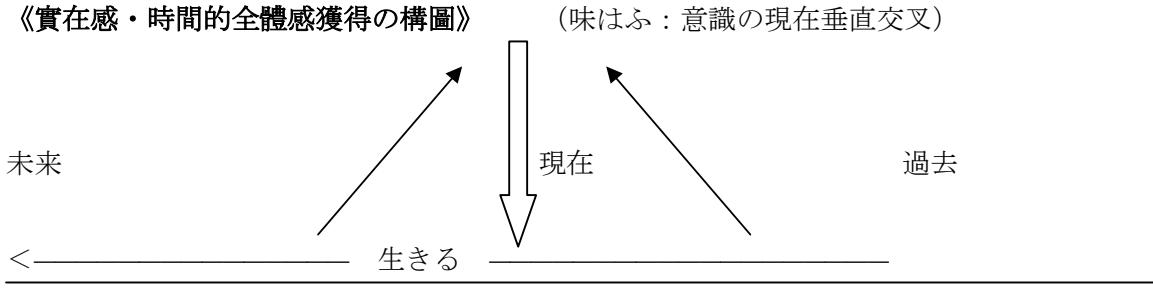


《實在感・時間的全體感獲得の構圖》



* 「意識は、平面を横ばひする歴史（過去・現在・未來といふ時間的繼續）といふものに垂直に交る」（P 532）時、「部分（現在）を部分として明確にとらへることによって、その中に全體（過去・現在・未來といふ時間的全体）を實感」（P 533）する。「私たちが個人の全體性を恢復する唯一の道は、自分が部分に過ぎぬことを覺悟し、意識的に部分としての自己を味はひつくすこと、その味はひの過程において、全體感が象徴的に甦る」。將にその時、生きるといふ日常的平板さから「上に脱け出た意識は、足下の現實が時々刻々に動いてゐることを實感」するのである。「宿命/自己劇化」による絶對への演戯が、上記の實感、今まさになすべきことをしてゐるといふ實感、「なさればならぬことをしてゐるといふ實感」を得させるのである。その時「過去と未來とから切り放たれた現在だけが、過去・現在・未來といふ全體の象徴として存在してゐる」のである。そして「前後に暗黒があればこそ、その間の時間を光として感じることができる」。

大事なことは、さうした劇的時間を味はふには、人は一時的に「時間の流れをせきとめなければならない（非日常的場面の設定化）」（P 534）といふことなのである。「拒絶の美德を忘れて、現實の偶然をないもかも取り入れるのは、一種のおもひあがりである。（中略）個人の全體性いひかへれば、その必然性を確立するためには、現實の偶然性を拒絶しなければならない。（中略）私たちは自分の能力を無視して、あまりにも多くの偶然に身をゆだねすぎる（集團的自我上における、場面・關係設定の亂發）。したがつて、私たちの意識は、いつになつても現實の平面から直立しえない」（P 534）。いつも現實に足をさらはれている状態なのである。